

翻訳：H. H. ホウベン

『ゲーテのエッカーマン—ある控え目な人間の伝記』（2）

林 久 博

3. お金にならない芸術

彼の将来の計画を聞いて、ヴィンゼンの親族は彼の帰りをそれほど喜ばなかったのではないだろうか？ 冬の間、家には彼の居場所はなかったし、貧しい日雇い労働者の妻となっていた姉と一緒に食事をする相手にも困っていなかった。この前線兵士は稼ぎを持ち帰っていたが、彼に必要なのは食事を摂って十分に体を休めることだった。出兵で経験した辛苦は後々までエッカーマンにも影響を及ぼした。かつて患っていた胸の痛みが強く現れていた。地方医療に携わるシュミット医師は彼を「顕著な回復の見込みなし」⁽¹⁾と診断したが、それは彼自身の体が証明していた。エッカーマンは新しい勤め口のことを全く考えようとせず、日々をお金にならない芸術に費やした。彼のスケッチを見たことのある戦友達は、彼が画家になるに違いないという意見で一致していた。彼はトゥルネーで描き始めた絵を完成させた。娯楽文学を収録したポケットブックに載っていたラムベルクの銅版画以外、手本となるものをヴィンゼンでは見つけられなかったが、彼はそれらを黒いチョークを使って大きく描き始めた。その際、彼は自分に何が足りないか気付いた。解剖学の知識もなく、オークの木や白樺におよそ似ているものを見つけ出すにしても言い難い苦勞を伴った。立派な師匠に付いて最初からやり直さなくては前へ進めなかった。だがヴィンゼンに本来の画家はいなかった。州都のハノーファーで暮らしているあのラムベルクしか彼は知らなかった。ハノーファーだって？ 旧友で郵便検閲官のエルンスト・クリンゲンベルクもそこにいなかったら？ この男がいたおかげで彼は最初の困難を耐えることができたのだから——このラムベルクの弟子に即座に功績を与えないわけにはいかないだろう！ クリンゲンベルクは喜んで彼を受け入れる意思を表明した。ヨーハン・ベーターは1815年1月には旅支度をして、深く雪の降り積もった荒地の道をハノーファーまでほとんど40時間歩き通した。ハノーファーでは友人が心から歓迎してくれた。

彼が最初にとった行動は、宮廷画家ラムベルクの所へ出向くことだった。だがラムベルクは彼

が見せた習作を好意的に評価しなかった。才能はある、とラムベルクは説明した。だが芸術家として食っていかなければならないし、技術的なものを習得するにはとても多くの時間がかかるのだ、と述べるのだった。彼は喜んで授業をしてくれることになった。すぐに彼は解剖図を数枚バインダーから見つけ出して、この新しい生徒に模写するように言った。

そんなわけでエッカーマンはクリンゲンベルクという友人のもとに寄宿し、ラムベルクの原画を模写することになった。完成したものを師匠に見せた。人体のすべての解剖図を彼は入念に仕上げた。こうして幸福な三ヶ月が過ぎた。克服しなければならない困難が多々あるという予感がこの熱心な生徒に次第に意識されてきたにしても、彼は勇気を失うことはなかった。しかし5月になると病気がちになり、6月にはもはや鉛筆を動かすことができなくなっていた。手は震え、関節が麻痺してしまい、肌は生気が失われたようになって、消耗性の熱が肺と内臓にまで達していた。彼は一体どうなるのだろうか？ クリンゲンベルクの家で彼は家族の一員のように看病された。これほど居心地の良かったことはこれまで一度もなかった。だが彼は友人に何年にも渡って経済的に負担をかけることなどではしなかった！ それに今ではこの病気を彼をすっかり仕事ができないようにしてしまい、出費が嵩さんで近いうちに払いきれなくなるほどだった。

クリンゲンベルクは彼を医者へ連れて行った。医者があちこち診察したが、一つ分からないことがあった。最後にこの医者は、水に落ちたことがあるか、と患者に尋ねた。「はい」とエッカーマンは答えた。「ホルスタインでのことです。退却を余儀なくされたゼーシュテットの戦いでのことです。」⁽²⁾ ようやく医者は事情が飲み込めた。医者は皮膚の働きを活性化させるために温浴やその他の療法を命じた。病人の状態はすぐに改善した。元気や快活さが徐々に戻ってきたが、彼を蝕んでいた命の不安は振り払えなかった。

このような苦境の中で一つの抜け道が提示された。この抜け道が心から芸術を愛するエッカーマンを小役人の狭い世界へと連れ戻してしまうにもかかわらず、彼はこの機会を捉えることに躊躇しなかった。軍務局の被服部門で登録係と文書係が必要とされていたのだ。この職に応募するとエッカーマンはすぐ採用された。この部署の上司はヨーハン・ザムエル・フォン・ベルガー大佐であった。エッカーマンはこの上司の中に、決定的な瞬間にあらゆる方法で援助の手を差し伸べてくれる支援者を見出すことになる。

数週間前の苦悩に満ちた不安から解放されて、彼は新たに元気を取り戻した。芸術家としてのキャリアを積むには、自分は才能もなく肉体的な抵抗力もないことを彼は理解していた。彼は自分が役人としての仕事をこなすのに相応しい能力を十分に備えていると自負しており、上司達も彼の仕事に満足して、「極めて品位の高い考え方の持ち主」⁽³⁾と褒め称えた。同僚の何人かは、キールマンズエックの猟騎隊にいた彼のように出征を経験していた。彼らとはすぐに打ち解けた。慎ましく生きていくためにいくらか必要なものがあつたとしても、彼は給与（300ターラー）をもらうことができたので、友人のクリンゲンベルクが寛大にも自分のためにしてくれたことに

対して恩返しできたし、年老いた故郷の母にも仕送りできた。

こうして今になって彼はハノーファーとその周辺をよく知るようになった。ラムベルクの生徒の一人で、後に肖像画家となってハノーファー技術大学の教師を務めたハインリヒ・シュルツと非常に親しくなった。周辺地域を歩き回る時はいつもシュルツと行動を共にした。またシュルツの芸術作品と接するようになって、自分が諦めなければならなかったものをある程度埋め合わせることができた。また彼は、古代美術研究の天才的な創始者であるヴィンケルマンの『古代美術史』やその同時代人であるラファエル・メングスの美術論文を読むようになった。しかしこれらの中で論じられていた美術作品を彼は知らなかったし、それ故に内容もほとんど理解できなかった。今になってようやくエッカーマンは、1813年8月に戦死した若き詩人であり英雄のテオドル・ケルナーの『豎琴と剣』を読んだのだった。ほとんどすべての同時代人や後の世代の多くの若者とと同じく彼はこの作品に熱中した。辛い行軍や夜の野宿、前哨勤務、戦闘といったケルナーがこの作品の中で描写したものをエッカーマンは兵士として毎日体験していた。ハンブルク周辺の村々が灰燼に帰してしまった時、このリュッツォウ⁽⁴⁾の騎兵の歌から湧き上がってくるフランスの放火犯に対する同じような怒りが、彼の胸の内にも湧き上がっていた。無心になって作品を受け入れる読者にとって詩の題材が及ぼす効果は第一の、そして決定的なものであったが、今では彼もそれを感じ取ることができた。ケルナーを読んで彼は自分の少年時代の習作を思い出し、詩作を再開してみたく^{した}なった。詩を認めたノートにはそれぞれのページごとに1815年8月25日から9月14日までの正確な日付が記されている。最初の詩は「我がエルンスト」、つまりクリンゲンベルクに捧げたものだった。どれもあまりぱっとしないオリジナリティーを欠く感情抒情詩ばかりだったが、例えばそれは「春」「憂鬱」「別離」などであった。ミンナという名の不実な恋人もこれらの詩の中で幽霊のように彷徨っている。当時流行っていたような偽ロマン主義も見られ、それがケルナー＝シラー的な情熱や、少々ヘルティーを感じさせる感傷性を薄めていた。だがこれらの詩の中には著者の名前を世に広める詩もあった。ナポレオンに対する二回目の出征にエッカーマンは加わることができなかった。大隊の医師が彼を役に立たないと宣告したからである。このコルシカ人を最終的に打ち負かしセント・ヘレナ島へ流刑にした後で、ドイツ中を熱狂の嵐が駆け巡った。至る所で祝賀祭が催され、愛国的な弁舌の才能を持つと自認する誰もが気分を掻き立てられた。ケルナーはそういう人達の優れた模範であった。エッカーマンも「多少なりとも彼のまねをしてみたいという強い衝動」⁽⁵⁾に駆られた。彼がかつて所属していた猟騎隊がフランスから帰還した時、彼は自らが待ち望んだチャンスをつかえることができた。「呑気な市民達が家で何不自由なく安穩に暮らしている間」、戦場の兵士が置かれていた「言いようのない苦勞」⁽⁶⁾をエッカーマンは覚えていて、9月にベラリアンスであった決戦⁽⁷⁾を一つの詩に認めた。1815年6月18日の日付のあるこの詩は勇敢な兵士達に捧げられている。

後世の人々は決して君達に相応しい名誉を払っていない
 君達がドイツの自由のために戦ってその名誉を獲得したというのに。
 君達は最高に神聖なものを勝ち取ったのだ——
 英雄を称える最高の歌が君達のために歌われんことを！…

彼は自費でこの詩をビラにして印刷し配布した。これは後に復刻され、しかも実際には歌うには適さなかったが曲も付けられた。これは彼の才能を証明するものとして称賛された。しばらくの間、エッカーマンって誰？と彼のことが話題となった。彼と知り合いになりたがる人もいたし励ましてくれる人もいた。二番目の詩もこういった種類のもので良い出来だったが草稿のまま終わった。「1815年10月18日のドイツの山々に掲げられた炎」という詩である。

山や谷に鳴り響き
 ドイツの川の岸辺に打ち寄せてくる
 ドイツの歌の心から沸き上がってくる自由の歌。
 河川が、小川が、野原が自由の音を奏で
 我々のオークの森が自由の音を響かせる
 そこに自由なドイツの老人達が休らうのだ。…

彼は今では昼も夜も詩を作ることをだけ考えた。これこそがかつてハンブルクの地下酒場で与えられたお告げの意味であるに違いないのだ！ だがどうやったら本当の詩人になれるのだろうか？ 他の人達がどうやって詩人になっているのかよく見ていなくてはならない！ そんな考えに彼は捕らわれていた。彼は猛烈に読書を始め、クロップシュトックを賛美し、シラーに心を奪われた。一年半の間、彼はシラーに心酔していた。「シラーを毎日崇め」⁽⁸⁾、彼の肖像画を自分で描くことさえして、その絵をオークの葉で飾り立てた——それはまだ1817年7月のことである。ある友人がこう警告してくれた。よく分からないものを模範にすると、それを模倣する人になってしまいかねない——だから理論的な書物を拠り所にすべきだよ！と。芸術の諸規則や韻律論など彼はまだ知らなかったし、これまでの詩作方法と云えば、自分自身に対して、または自分が模範としてきたものに対して臆することなく「精神が筆を取らせる」⁽⁹⁾ ようにすることだった。だが理論的な著作はほとんど理解できなかつたし、専門的知識を持った第三者によってそれらの著作を読むのが嫌になってくるのはむしろ喜ばしいことだった。彼はこう述べている。「理論家達は偉大な作家達からその絞り汁さえも奪い取ってしまう。——だったら、その作家自身を読めばいいさ！ そうやってこそ芸術の秘密の手がかりが掴めるものさ！」だが彼に最も強い印象を与えたのは次のようなアドバイスだった。生まれ持った才能さえあれば十分だとは言えないよ、広

くて可能な限り「古典的な」⁽¹⁰⁾ 教養が詩人には必要さ！　これが彼に深い印象を与えた。つまり勉強すること、勉強することなのだ！　絵画においてもそれはまさしく同じことだった。

ラテン語ができなければ古典的な教養などありえない！　だから彼はギムナジウムの教師であるフリードリヒから個人授業を受け、毎日6時間ラテン語を勉強した。しかしこの授業の進度は彼にはあまりに遅すぎた！　本を重そうに抱えている若い生徒達を見ると羨ましくてならなかった。そもそもギムナジウムでのみ着実に学ぶことができるものだ。だから彼は真剣に辞職を考えた——しかしどうやって生計を立てたらいいのだろうか？　彼はこの教師に心中を打ち明け、これまでの自分の人生を物語り、詩を書き送った。その次に行われた1816年9月24日のラテン語の授業で、フリードリヒは感動と賛嘆を口にして彼を迎え入れた。以前からフリードリヒはエッカーマンを何か並外れたものと思っていた。彼には正式な勉学への道が開かれなくてはならないのは言うまでもない——無料の授業を受けるべきだし、場合によっては奨学金が必要だろう——教師達も彼に授業を受けさせるために力を合わせて頑張ってくれるに違いない！　フリードリヒはゲッティンゲンの有名な古代学者ハイネが書いたヘーレンの伝記を渡した。粘り強さと勤勉さがあればどんな時も成果が得られるという模範をこの人物が示していたからである。——だが12月6日に行われたザールフェルト枢機卿との謁見はエッカーマンを落胆させるものだった。ロックムの大修道院長でありカレンベルク地帯の^{プレジデント}首長であるこの有力者は、彼をそっけなく、ほとんど侮辱的にあしらったのだった。つまりこの人物は彼のために何もしてくれなかったのである。フォン・ヒンユーバー^{カビネッツラート}王室顧問官がお前を援助してくれる唯一の人物なのだよ——この人に新年の挨拶を述べに行くといいだろう、神様もきっとお前のことを気に掛けてくれるだろう、そうすれば神様はお前のために階段を照らし出して下さる、とザールフェルトは言うのだった。

エッカーマンはすっかり絶望してしまった。だが「運命に対抗する鉄の反抗心」⁽¹¹⁾ が彼の心を離れることはなかった。彼はフリードリヒの助言を受けて翌日には上司の前に立ったのだが、まともや突如としてあらゆる人間の中で最も幸せな人物になったのだった。フォン・ベルガー氏は、彼がギムナジウムに通い、勤務時間もそれに合わせて調節することを許可してくれたのである。氏は彼を正規に雇うことにして、1817年1月15日、彼に宣誓させた。そして——60ターラーの手当てを与えたのだった！　フリードリヒは12月15日、彼を^{リユエツェウム}高等学校校長ルーコプフの所に連れて行った。彼の試験の出来は悪かった。なぜなら学校でなされるような質問に対してエッカーマンは訓練を受けていなかったからである。しかしながらフリードリヒが彼のことをよく言ってくれたので、「並々ならぬ努力も考慮して」⁽¹²⁾ ルーコプフは彼を^{セク}第六^グ学年に編入してくれた。

こうして殺人的な日々が始まった。つまり朝の5時から6時の間に起床して灯りをつけ、暖房するために女中を起こし、その間にブーツを磨いて上着にブラシをかけ、顔を洗って着替えた後、朝食（コーヒーと2ペニヒのパンを一つ）をとるという日常だった。ラテン語の予習のために8時から10時まで机に座って勉強した。それから大急ぎで本を家に置いて、11時45分までには事務

所に着いた。昼食をクリンゲンベルクの所で手早く済まし、1時少し前にまた学校へ戻った。家でコーヒーを飲んでから、5時半から7時まで事務所で働いた。夕食後、8時から9時までは個人授業があった。フリードリヒにラテン語文法を教わり、週に二回ほど教師のゲーラッハのもとでヴェルギリウスの『アエネイス』を読んだ。学校のない水曜日や土曜日の午後はレポート作成に費やし、日曜日は次の一週間の準備に当てた。学校の授業は思い通りのものではなかった。クラスの教師は病気で休んでいて、代理教師も力量不足だった。かつての軍務局の同僚で、今ではヒルデスハイムのオストハウス顧問官のもとで働いている友人ランゲ宛の手紙(1817年1月16日)の中で、エッカーマンは「授業中はいつも騒々しくて授業内容が一言も聞き取れない」⁽¹³⁾と溢している。「私は三番目の席に座っていたのだが、不運だったのは隣の席の生徒があらゆるいたずらの権化で、ほぼ毎時間教室から追い出されるほどだった。」⁽¹⁴⁾しかしこれらの生意気盛りの生徒達も、もうすぐ25歳になる同級生にあえて近寄って行くようなことはせず、エッカーマンも後に述べているように「私に対して気まぐれに当たり散らさない配慮も十分」⁽¹⁵⁾持ち合わせていた。その他の点で「いつの日か、より高次のものが自分の中から生まれてくる」ように、今は「自分の人生を断念」しなければならなかったことがランゲ宛の手紙には記されている。だが彼は自分がこれまでになく健康で、「高くから差し伸べられる手によって力を与えられている」⁽¹⁶⁾ように感じていた。

もちろん彼はこうしたテンポに長くは耐えられなかった。4月には倒れてしまったのだ。二人の主人に仕えることはできず、そのうちの一つを諦めざるを得なかった。もちろんそれは学校の方である。それ以外にどうやって生活していけたらろう？ また彼もとっくに気付いていたのだ。自分にとってこの学校通いそのものが「よくよく考えてみれば馬鹿げたこと」であり、自分の年齢では独学で勉強することが大事であって、「持って生まれた精神がすべてで、博学さなどは必要ない」⁽¹⁷⁾ということに。こうして彼は復活祭には学校をやめた。彼は自分自身をシラーの『群盗』の登場人物ローラーのように感じていた。「絞首台から帰ってきた！」と。——彼は「前よりも体調は悪くなっていたよ」と4月14日ランゲに書いている。「私の守護神の喉にロープが掛けられてしまっていたのだからね。だけど私の守護神はこのロープを引きちぎって、今では力強く勇敢に息を弾ませて、〈命の吹き込まれた眼差しから稲妻が飛び散〉っているほどさ。束縛から解放されて、ミュエズの息子がいつも使っていた手綱を我が身に感じるシラーのベガスみたいなね。」⁽¹⁸⁾

彼はまたもやラテン語の個人授業に甘んじていたが、週に二回、ヴェルギリウスやオヴィディウス、そしてキケロを読んだ。その後カエサルやホラティウスが加わった。彼は自分の勉強のために「ドイツ的な人間理解や詩作」に取り組んだ。またロギータ夫人とも仲良くなろうと努めた。こうして彼は、彼女が「この若者の軽はずみな性向をしっかりと落ち着か」せる才能を持っていて、「賢さという高貴な姑に仕える信頼できる女中」⁽¹⁹⁾であることに気付いたのだ。文芸の女神

ミューズが彼のもとに再来したのはしばらく経ってからのことだった。4月24日、友人ランゲに対して彼は「ミューズがまた私のもとで眠りにつき、私の夢を編み込んでいる」⁽²⁰⁾と打ち明けている。諸々の詩を収めた二番目のノートは1817年2月から8月までに書かれたが、大抵は1821年の彼の『詩集』初版に収められているような恋愛叙情詩であった。だが彼は1838年の作品集にはこれらの最初期の恋愛歌の中からたった一つしか採用していない。それは「愛の衝動」という詩である。ノートに収められたすべての詩の中で自分の体験から生まれた詩はほとんどなく、だからこそ「愛の衝動」という詩からも他者の声がこだましている。だが一つの新しい響きがこのノートの中に割って入っている！ それは次のように「私の^{ビルドゥング}人格形成」を自由律で歌い上げている。

彼を沈めてはならない
 親愛なる母なる自然よ！
 彼の魂の夜に
 春の日差しを流し込むのだ
 その教え子の
 天才の翼から
 のしかかる学校の埃を取り払うのだ。

つまり彼はこの春、彼にのしかかっていたものすべてを押しつけてしまうあの作家を、つまりゲーテを知ったのだった！ 「旅人の嵐の歌」が彼に忘れがたい印象を与えた。1817年のノートの最後の詩はこう始まっている。「それをお前が呼び覚ましはしない、燃え上がる炎よ」⁽²¹⁾。また「見捨てられた女」という別の詩では「魔王」の響きを感じ取ることができる。「彼は夢中になる」という歌からはゲーテのリズムが聞こえてくる。つまり「赤の他人でいることに私はどうやって耐えたらよいのだろう」…。

4月14日のランゲ宛の手紙で彼は二度シラーを引用しているが、その後でゲーテの「すべての人に同一の基準を当てはめるわけにはいかない」⁽²²⁾という詩句を引用し、4月24日にはランゲに次のように促している。「前にもゲーテを読んだことがあるじゃないかと言ってゲーテのことを悪く言うが、それはもうやめてくれないか——ゲーテの作品をいくつか味わって判断が変わってしまったのだ！」。悪しき愛国者であり、「偉大なる異教徒」であり、そして「ローマ悲歌」の作者であるゲーテに対して、どうやらこの二人は多くの同時代人が抱いていた偏見を共にしていたようである。エッカーマンは解放戦争に参加していて信仰心に篤く敬虔で、まだ1818年には自らを「墮落していない若者」と呼んでいた。だから基本的にはゲーテが読まれることはないのだ。しかし偶然彼はゲーテの詩集を手にとった。そして故郷の湿地で女の子達が「あの山の上に」と歌っていたお気に入りの歌が、敬愛するゲーテの「羊飼いの嘆きの歌」であることに気付いて驚

いたのである。こうして彼はゲーテを繻き、目を開かれていくようになる。彼は次のように述べている。「ようやく私は目が覚めて、本当の自覚に到達したような気がしました。これらの歌には私自身これまで知らずにいた内面が反映しているようにも思われたのです。また私は何かよそよそしいものや学者ぶったものにもぶつかることもありませんでした。(…)むしろ私が見つけ出したのは、あらゆる欲望や幸福や苦悩の中にある人間の心そのものであり、目の前に広がる晴れた昼のようなドイツの自然であり、優しくも喜びに溢れた光に包まれたありのままの現実でした。私はこれらの歌に包まれて何週間も何か月も生きたのでした。」⁽²³⁾ その後、誰かが彼に『ヴィルヘルム・マイスター』を貸してくれた。彼は友人ランゲへの7月13日の手紙の中でこの小説を読むように勧めた時、シラーのことを悪く言うこともなく、次のように手紙を締め括っている。「万が一私がシラーと同じくらいゲーテを評価していないというのであれば、私は馬鹿に違いないさ。この〈二人〉を尊敬し愛さないということがあっていいのだろうか、またそれを望まないことがあっていいのだろうか？」⁽²⁴⁾ こうしてエッカーマンは『対話』(1825年5月25日)の中のゲーテの自覚ある言葉を1817年に先取りするのである。ドイツ人は「論争の種になるような人間がいつでも二三人いることを喜ぶものだから！」⁽²⁵⁾ という言葉である。——だが、ダイスター山へ遠足に出かけた夏のある日のことだった。クラウスが1776年に描いた青年時代のゲーテの肖像画⁽²⁶⁾を彼は初めて目にするのである。午後の間はずっと肖像画のことが頭から離れなかった。彼はすぐに自分で描いたシラーのスケッチと引き換えにゲーテの肖像画を手に入れた。こうして『群盗』の作家は彼の中で王位を退くことになる。しかし彼はシラーの絵のあった場所にゲーテを掛けるこ



ゲオルク・メルヒオール・クラウスによる油絵『ゲーテ』(1775/6年)

とはせず、「滅多にしか拝められない新鮮な眺めであってほしいので」⁽²⁷⁾きれいに紙に包んで勉強机の上に置いたのだった。そうこうするうちに彼は『詩と真実』やゲーテの戯曲を読み、最後に『ファウスト』を読んだ。というのも最初はこの作品に恐れ慄いていたからである。だが今では『ファウスト』を休日のたびに読み耽った。彼はゲーテ全集が欲しくてたまらなかった。それで作品集の新版(全20巻、1815-19年)を購入して読み耽った。ゲーテ以外のことは何も考えられなくなっていた。「私は行く所や立ち止まる所ではどこでも、散歩の時でも仕事の時でもゲーテのことが念頭にあって、夜の夢の中でさえゲーテのことを考えていたので、ゲーテからあれこれと教訓を得たのでした。」⁽²⁸⁾この時彼が分かったのは偉大な詩人とは何かということであり、そう

なるためにはどれほど広範な教養が必要とされるのか、ということである。大学でだけ自分はこの教養を学ぶことができる。それ故ゲッティンゲンへ、できれば次の復活祭には行かなくてはならない、そう彼は考えた。

そのためにとりわけ彼に必要だったのは奨学金だった。彼は優秀であることを示す証明書を出してもらえた。上司のフォン・ベルガーと教師達は彼の「類まれな彼本来の資質」、つまり「自分を高い目標に向けて形成したいという意図」⁽²⁹⁾を褒め称え、彼の勤勉さ、秩序に対する愛、模範的な振る舞いを文書の形で証明した。ザールフェルト大修道院長でさえ今では（1818年1月31日）こう述べるほどだった。つまりヴィンゼンのパリジウス教区監督によって推薦されたこの者は、これまでの驚愕すべき進歩を考えれば間違いなくもっと出世するだろう、と。そして彼のアカデミックなキャリアを支えようとして、「この希望に満ちた若者を高い地位にある支援者達に」⁽³⁰⁾推薦した。——国によるものであれ個人によるものであれ、奨学金が与えられる所ならどんな所でもエッカーマンは陳情書を出した。書類を書くことや陳情に行くことに労を惜しかなかった。だが彼が「高い地位にある支援者達に」^{プロトシュトゥーディウム}自分のお願いを持ち出すと、どんなお金になる学問を学ぶことに決めたのか、と厳しく追及するような質問をいつも投げかけられた。お金になる学問を誓うしかなかった！ 自分の天職が芸術であること、そして「芸術作品を自ら創作したり批評すること」が自分の学問の目的であり目標としたいことであると告白すると、とても愛想の好かった額にしわが寄って、信じがたい顔をしながらも同情して、そういうことにはお金を出せない、と言われるからだった。神学者や法学者、文献学者や医者になるための奨学金はたくさんあった。しかし人々の役に立つような市民的な職業のカテゴリーに入らなければ、むなしく引き揚げるしかなかった。詩をひねり出すことやそういったお金にならない芸術は、裕福なお金持ちやディレッタントのためのものだった。こう言われることもあった。何か役に立つことを学んで生活できるだけの収入ができてから、暇な時間に思う存分詩を作ればいいんじゃないか！と。職業としての「文士」^{リテラート}に対して、不信感や嫌悪感が至る所で渦巻いていた。——だが依然として彼が願っていたのは、誰かが理解を示してくれることだった。1818年3月18日、彼はもう一度政府に陳情書を出した。それは全紙十枚分の書類の形式で書かれ、自分の才能を開花させることは道徳的な義務であること、芸術は礼拝と同義であること、外面的な栄光や高い地位は自分の気持ちを動かすことではないということが記されていた。——事務所では自分の後任者を探し出していた。だが全部無駄だった！ 唯一認められたのは無料の食事だった！ お金にならない芸術のためにそれ以上のことは残されていなかった。それは何も持たないでゲッティンゲンへ行くということを意味していた——だから彼はハノーファーで小役人のまま留まっていなくてはならなかったのだ！

4. 初恋

1815年にエッカーマンが書いた最初期の詩、つまり23歳の青年が書いた詩の中に、恋愛叙情詩は全く見つからない。それらの詩の中で幽霊のように姿を現す「ミンナ」もシラーから借用した添え物に過ぎない。エロスとアポロが手に手を携えて一人の大人の男になっていく時期になっても、彼は詩人へと成長することはなかった——これは彼の中での原初的な力が表現することを求めていることの証左である。ヴァインゼン、リュネブルク、ユルツェン、ベヴェンゼンでは夢物語のような彼の高い理想に合致する女性には出会えなかった。日常の灰色の空にあっても、彼は不平を言うこともなく忍耐強く前に進んだ。だがその灰色の空を突き破って空に舞い上がるヒバリのように、歓喜の歌を歌う太陽の光は降り注いでこなかった。彼は両親の結婚後、遅くに生まれた子供であった。やつれ果てた母親達から生まれた子供というのは、すでに幼くしてやや年を取って見えるものである。エッカーマンの外見がまさにそうであった。人生においても彼は遅れを取っていた。24歳になっても教室の長椅子に座ってラテン語文法を猛勉強していた。そんな年齢にもなって恋する高校生として誰かに夢中になるなんて全くの戯画でしかないだろう。1821年の『詩集』に収められた恋愛詩のほぼ半分は自己体験から生まれたものではなく、残りのものも案出されたものにすぎなかった。つまり、内的な真実によらないものだったのだ。そのことを彼は1829年、女友達のアウグステ・クラーツヒに正直に告白している。自分が人生の明るい面から逸脱していると彼は自覚していたのだろうか？ 青春時代に書いた詩を見てみると、それを自覚する響きを感じ取れるだろう。

最愛の人が住む家の戸口に立って
 待たされるのはとても好きだ
 月はこんなにも明るく輝いて
 こんなにも多くの星が瞬いている。
 遙か彼方に星が出ている
 だが、何が私の願いを満たしてくれるのだろうか！
 私は上に上がって行くことはできないし
 かといって誰も私の所へ来てはくれないのだ。

だが、ついに彼のもとにも愛の星が転がり込んできた。彼はハノーファーでは他の若者と違って、つまり取るに足らない地位であったにしても彼は安定した身分にあって、昇進の見込みのある公国に仕える役人なのであった。多くの市民階級の娘達はあれこれ考えて、そのような役人を我がものとしようと探し回っていた。だが彼は長い髪に覆われた品のある容貌をしていたに

もかかわらず、依然として内気な青年のままだった。青年時代の唯一の手紙の記録、つまり友人ランゲへの秘密の告白においても、優美な女性性はどんな役割も果たしていない。同級生の多くが彼に平気で向けてくるような率直さを彼はそもそも嫌っていた。彼はとっくに浮足立つような年齢に達していたのだが、目には純真な誠実さが輝いていた。居心地のいい仲間内にいれば楽しくいられたが、騒々しいバカ騒ぎや無礼講となると自分自身の中に入り込んでしまうのだった。年齢を重ねても、騒がしいお祭りからこっそり抜け出してしまう寂しい人なのだ。彼が決して感情を表に出さないのは子供時代に関係している。つまり、お前は本来ここにはいない！という自己意識からくるものである。かつて広大な湿地で牛飼いとして働いていた時と同じように、彼がワイマル時代も一番好きだったのは、一人きりで、または年下の友人達とエッターズベルクの山頂に居ることであった。そこで彼は友人達に自然の神秘、とりわけ大好きな鳥の世界の神秘を打ち明けるのであった。農家の居間で孤児を見つけると、その子に自分自身の過去が繰り返されているように見え、精神的な退化と道徳的な墮落というこの子が確実に見舞われる運命からお前はこの子を守ってやれるのだろうか、という思いが激しく心に込み上げてくるのだった。相続権を奪われたすべての者へ向ける同情という美しき花もまた、彼の子供時代に根差している。彼は年を重ねても誠実にその花を育ててきたのだが、大抵の場合、自分自身すら助けることができないという己の無力さに苦しみ続けた。

すでに25歳となっていたこの青年が自分の理想に合う女性を見つけたのなら、その女性は将来の妻となる人であるに違いない。彼にこの出会いがやって来たのは1818年の春または夏のことであった。名をヨハンナ・ベルトラムといい、まだ17歳の若い女の子であった。彼女は1801年12月11日生まれで、商人アウグスト・ヴィルヘルム・ベルトラムと妻ルイーゼ（旧姓ラート）との間に生まれた娘であった。父親は家主として僅かな財産をもとに隠居生活に入っていた。かつてはそういった早期の隠居は賢明な選択とされていたのだ。この家庭では慎ましやかな暮らしが営まれ、ヨハンナが生徒達に個人授業をして、ささやかな家政に収入をもたらした。彼女の二人の兄弟は将来の義兄となるエッカーマンよりもずっと若かった。彼らはある種の畏敬の念から父親のような友人としてエッカーマンをいつも仰ぎ見ていたが、役所ではすぐに彼より出世した。兄のクリスティアンは1798年生まれで、ハノーファーの^{リュネッツェウム}高等学校に通い、1819年には数学専攻の大学生としてゲッティンゲンへ赴いた。彼は第七学年の後半はエッカーマンの同級生でもあった。弟のヴィルヘルムは1800年生まれで、1819年には一時的に税務署に勤務していたが、後に市長にまで昇りつめた。ヴィルヘルムを通じてエッカーマンはヨハンナと知り合った。ベルトラム家の夏の庭で、または軍務局や税務署の若い人達の催しで偶然そういうことになったのだ。彼はこの若くて可愛い女の子の虜になった。しかしこのヴィンゼンの内気な青年はとても人見知りで、口数も少なく不愛想だった。1821年の『詩集』に収められた感傷的な詩——それらの詩は後にシラーの原作を翻案する形で発表された1838年の『恋愛詩 第一期』へ組み入れられた——の中に、

初愛の春を過ごす彼の自画像が描かれている。

君の視線が私の心臓を貫いてしまった
君の傍らを通り過ぎ
脇へ視線を逸らすと
まるで君のことを気に掛けてないみたいだ。
君の視線が私の心臓を貫いてしまった！

君の視線が私の心臓を貫いてしまった
遠慮がちに君の傍に立つと
視線をあちこち下へ向けてしまい
ほとんど君を見上げることができない。
君の視線が私の心臓を貫いてしまった！…

彼がどのような状態に置かれているか、友人達はすぐに気付いた。当てこすりをしてみたり、彼を赤面させる冗談を言ってみたりしたが、それは自分ことを信頼してほしかったからに他ならない。おそらくクリンゲンベルクの妹である女友達のレーネによって、彼は突然次のことを知らされた。自分自身にも、ましてや他人に打ち明けたことのないハンヒェン（ヨハンナの愛称）・ベルトラムへの静かな愛情が、すでに町中の噂となり結婚話にまでなっていたのだ。彼はそのことにとっても驚いて、彼女にこの噂をできるだけ抑え込むのを手伝ってほしいと懇願し、こう述べた。あなたには知っておいてほしいのですが、私は自分の手で十分に「扶養」⁽³¹⁾することができるくらい成功しないうちは、愛する女性に結婚について何か言うつもりはないし、それにはきっとまだ二年から四年はかかるに違いないでしょう、と。彼はレーネに、自分がハンヒェンを愛していて、彼女も自分のことを愛している確信がある、と述べている。1818年12月15日のレーネ宛の手紙にはこう記されている。「私達はそのことについて何か言ったことはありませんでした。一緒にいと私達の心はお互いに語り合い、この話し方が言葉以上のものとなっています。ああ、あなたがそれをご覧になって、どのように私達がお互いの仕草や笑声や話し方を受け取っているのか、その様子を観察していただけたら！ 私達の気持ち、考え、それら全部がそもそも同じなのです。他方で異なった部分もありますが、それは仕方のないことでしょう。どうしても手に入れない素晴らしい幸運の女神のように、美しいご褒美のように、彼女のことが私の頭に浮んでくるのです。」⁽³²⁾

友人達はこうした控え目な態度を大袈裟なものだと思っていた。すぐに結婚することなど考えられなくても、彼らは皆すでに花嫁をもらっていたからである。1819年の夏、はてしてエッカー

マンもハンヒェンと婚約した。彼の幸福は「言葉では言い表せない」ほどだった。こうした日々の中で生まれた詩の一つに次のものがある。

私がかつて歌を書くことに抑えがたい欲求を感じ
 選りすぐりの美しい絵を描いて
 甘美な愛の幸福を
 ときおり書き留めようと思いました
 私はそのことをともかく褒めてやりたいと思います。
 だがこう思ったのだ、これがうまくいくのは
 いつか私が心から感じられる愛の歓喜を
 心地よく確かめた時ではないかと。

だが今ようやくその時がやって来た
 愛する口元に寄り添い
 地球上のあらゆる苦しみから解放されて
 心から感じられる愛の幸福を探索する時が。
 そのような歓喜を書き留める衝動は
 おそらく消え去ってはいませんでした。
 だが言葉で言い表せないものを表現しようとするのは幻想であって
 それに私は取り巻かれていたのです。

彼の詩的な翼の射程がどれほどであったか、ここに垣間見えるに違いない。1821年に自分の詩集を作っている時に彼自身もおそらく感じていたのは、「数々の歌がひしめき合いながら滾々と新たに湧き出して」⁽³³⁾ くるものではないということである。彼は愛のない時代に書き溜めた人工的な花を相変わらず持ってこなくてはならなかった。そうでもしないとハンヒェンのための花束は乾いて枯れてしまうからである。本物の花は確かにささやかな草花でしかないが、言葉としてはともかく自分自身の草地で成長したものである。時としてその草花から微笑ましい幸福のしるし、つまり一滴のユーモアが光って、彼の一番愛すべき側面を垣間見せている。これらの歌の一つに「彼女に会いたい、ああ一度でいいから！」がある。それはワイマルの指揮者カール・エーバーヴァイン、ドレスデンのカール・ゴットリーブ・ライシガー、ルドルフ・グリッツナー、リヒャルト・ザイフェルト、ゴットリーブ・ヴィーデバインという五名の作曲家によって曲を付けられるほどの出来栄であった。

エッカーマンが女友達レーネに宛ててあの手紙を書いた時、彼はちょうど「宗教的な作品」⁽³⁴⁾ つ

まり「信仰の幸福」という長大な詩に取り組んでいた。彼はそれをブロックハウス社のポケットブック『ウラニア』で予告された懸賞募集に送ろうとしていた。だが締め切りに間に合わなかった。自分を取り巻くハノーファーの小市民的な世界から、彼は這い上がろうともがいていた。だがハンヒェンをすぐに「扶養」できるようになる見通しはなかった！

5. 希望を捨てず頑張るしかない！

1821年5月、ハンヒェンの弟のクリスティアンがゲッティンゲン大学の第一学期に赴いた。またエッカーマンと一緒にラテン語を猛勉強した別の友人トホターマンも同じくゲッティンゲン大学へ旅立っていた。どんな悲痛な思いを抱いて残されたエッカーマンは彼らに別れの言葉を述べたのだらう！ だが秋になると彼は少なくともこの大学都市のことがよく分かるようになっていった。ヴィルヘルム・バルトラムとヴェーザー溪谷を徒歩旅行して、その旅をゲッティンゲンにいるクリスティアンを訪問することで締めくくっている。9月5日、ピルモントで彼は愛するハンヒェンに最初の手紙を書いている。だが美しさを褒め称えられるこの地を自分の目で見てしまうと、ハノーファーへの帰り道はお役所的な軛に屈服していくことのように感じられるのだった。

お金になる学問を選ばない限り他人の援助など当てにできなかった。自分のものと見定められる道に留まろうとするのであれば、自分の力で道を切り拓かねばならなかった。自分のことを信用していない人々に向って、自分の真の職業を納得させる何かを彼は示す必要があった。彼は形式的には見事な整いを見せる五十九の^{シュタンツェ}八行詩からなる詩を書いた。それはすでに言及した「信仰の幸福」である。これは一つの教訓詩であり、ポケットブック『ウラニア』の出版社が1819年の懸賞募集に際して「特に歓迎される」と指定したような教訓的な意図を持つ「書簡」でもあった。彼は自分自身が信仰の試練をどのように克服し勝利したかを述べて、この題名が意味するものを雄弁に褒め称える。

私は熱狂しながらこう叫びたい。ああ、称えるのだ
君達は皆、疑念という濁りの中で
ただ地上の暗い影にしがみついているが
眼差しを上げて、目を開き、愛を感じるのだ
愛は眼差しが上を向くところはどこでも
何千倍にも膨れ上がって君達の周りに漂い
すべてを生で満たし
君達が足を踏み入れると、君達に向かって流れ出てくるのだ。

そうこうするうちに彼はゲーテを勉強することによって、外面的には多くのことを学んでいた。またブロックハウス社のポケットブックのタイトルのもととなったティートゲの「ウラニア」からエルンスト・シュルツェの「魔法をかけられた薔薇」(1818年)に至るまで、あの時代に多く読まれた叙事詩を読んでいた。だが詩の波が溢れて彼のもとへと流れ込むことはなかった。もしそうでなければ半ば神学的なこの作品に丸一年悩まされることはなかっただろう。彼はこの懸賞募集の期限を守れなかった。だが「支援者」として味方につけておきたい影響力のある人達に自分の原稿を送ることにした。1819年10月、彼は原稿を王室顧問官フォン・ヒンユーパーに送り、次のような感じの良い言い回しを用いて自分のことを推薦している。「ホラティウスからどれほど遠くかけ離れていようと、詩人の一人に数え入れてほしいと望む者なら誰でも支援者を必要とするものなのです。」

だがこの詩は大して感銘を与えなかった。長すぎたのだ！ 注意を惹きたいのであれば何かもっと優れたものでなくてはならない！ 当時、運命悲劇が流行していた。例えばミュルナーの『罪』やグリルパルツァーの『始祖』が前代未聞の成功を収めていた。ゲーテやこの頃よく読むようになっていたシェークスピアと比べても、運命悲劇の流行は彼に不利だったに違いない。それは美学的な観点においてだけのことではない。気ままな運命の暴力の犠牲となって自分の知らない罪が絶望的に降りかかってくる——こうした文学傾向は「信仰の幸福」とは相容れないものだった。エッカーマンはこれを非道徳的に感じ不愉快に思っていた。この傾向を否定したかった。人間自身の胸の中に運命の星があり、運命はその人物の性格によるものであって、「蒔き方次第で良くも悪くもなるが、未来に開花し実を結ぶ種を人は現在という時間の中で撒いていくものである」⁽³⁵⁾ ということを証明したかった。運命という呪いに人は無力である、という近代的な物の見方に対して、彼は批評家として立ち向かおうとしなかった。詩人として、言葉ではなく行動で立ち向かおうとした。つまりアンチ運命劇を書こうとしたのである。歴史の中から使える題材をまだほとんど知らなかったので、自分でストーリーを考え出さなければならなかった。こうして彼は、営林署員の娘を誘惑し彼女の兄を撲殺した後で世界を放浪する若い伯爵エドゥアルトを作り出した。ずっと後になってから伯爵は戻って来るのだが、良心の呵責が彼にしつこく付きまとう。確かに「運命という幽霊」が、あの娘が自分に抱きついてきたのだし兄自身が自分を殺人へと向かわせたのだ！と語りかけ無罪判決を下すのだが、彼は罪を重ねて破滅していく。「罪は人を破滅させる！ よこしまな心を憎み善を支持せよ。」このモットーは悲劇『エドゥアルト伯爵』の二つの原稿のうち最初のものに書かれている。モットーというよりも説教といった方がずっと相応しいかもしれない。実際、当時のエッカーマンは神学的な言い回しが口癖になっていた。だが神学者になろうという考えはどうやら全くなかったようである。1819年のうちにこの作品は第五幕まで進んだ。1820年3月と4月になってようやく書き終えた。彼はこの仕事にとっても満足していた。なぜなら彼の考えでは、「すべてがとても楽々と自然に出来上がっていき」⁽³⁶⁾、運命劇

作家とは対照的に現実の人生を描き、叙情詩人以上のものと認めているシラーとは異なって、登場人物が「作家自身の色彩ではなくその登場人物自身の色彩」⁽³⁷⁾を持っていたからである。彼はゲーテ的な意味で「客観的」であろうとしたのだ。ストーリーが展開していくうちに悲劇的運命というジャン・パウルの理念が彼の念頭に浮かんできた。つまり「悲劇的運命というものは途切れることのない人間的不協和音の反響音であって、また悲劇の主人公は落ちていく人間でなくてはならず、その人物にとって禁じられたリンゴを齧ることは世界を味わうことである」⁽³⁸⁾という理念である。彼はゲッティンゲンの哲学者であり文学史家のブーターヴェクの『美学』を勉強したが、戯曲の言語は無条件に詩行でなくてはならないというブーターヴェクには賛成できなかった。ゲーテの『イフィゲーニエ』や『タッソー』のような作品では無条件に詩行となっていなかったのだ。これらの作品では登場人物は「可能な限り規則正しく高い人格形成の段階に」⁽³⁹⁾立ち、それ自体すでに詩的だった。ただ登場人物が非常に多種多様で、その人物の置かれた状況も同一ではなく、それが「ひょっとしたら全然詩的ではない」⁽⁴⁰⁾ 場合であれば、シェークスピア作品のように言語は人物と状況という二つを目指して詩行を散文で置き換えねばならない、と彼は考えた。また詩人というものは「脇道に逸れた所にある時代精神に対してではなく、物事の本質から導き出され、どんな時代にも相応しい芸術の要求に忠実である」⁽⁴¹⁾ べきだと考えた。それ故にエッカーマンは人気のある運命劇や大半の散文に見られるような「我々の時代の流行」⁽⁴²⁾ とは異なる戯曲を書いたのである。人物や状況がそれに相応しいと思われる所にのみ彼は詩行を組み込んだ。彼は意識的に演劇と対抗するものを書いたのである。彼自身述べているように、「手に汗握るような素早く進行するストーリーよりも、様々な状況の静かなスケッチを行いました。その結果、脇役達があまりにも場所を取りすぎて、作品全体が広がりすぎてしまった」⁽⁴³⁾ のだが。この自己批判がすべてを物語っている。エドゥアルト伯爵は絶え間なく一人でしゃべっている。その一方で「あらゆる幻想的なものや神秘的なものをまるで疫病神のように」⁽⁴⁴⁾ 避けているにも関わらず、なぜ運命悲劇のあらゆる仕掛けを備えたストーリーが運命劇を否定するのか、その理由を決して読者に分からせようとしていない。原稿を見た友人達は訳が分からず頭を振った。いくつかのシーンはむしろ喜劇ではないか、と彼らは言った。これらの批評家達は明らかにシェークスピアを知らなかった。自分の作品を当分はまだ机の中に隠しておいた方がよいことをエッカーマンはすぐに理解した。彼は後になって何度もこれを修正した。改訂作業に何年も取り組んでいたが完成させることはできなかった。ワイマルでもいくつかのシーンに手を焼いていたが、それは空しい試みだった。ゲーテの仕事の管理をしながら作家として作品を生み出すという秘め事に深く入り込んでいけばいくほど、この色褪せた若気の過ちは彼にはよそよそしいものとなっていった。

またしても彼は何の成果もあげることができなかった。そこで彼は原稿をすぐにゲーテに送って意見をもらおうかと考えた——だがその勇気はなかった。しかし役人にとどまり続けるという

運命を彼は依然として受け入れることはできなかった。ともかく戯曲を作り出したのだし、自分の目から見れても決して価値の低いものではなかったのだ！ 結局、友人達はこの作品の何を分かっていたのだろうか！ 彼は彼らとの距離を感じた。その間にも彼は熱心に勉強を続け、シェークスピア、ホメロス、ソフォクレスの翻訳を読み、また伝記を多く読んだ。同級生達は彼についていけなかった。彼らの視野は限られていた。善良な人達ではあるが、音楽隊としては下手なのだ。⁽⁴⁵⁾ 彼は彼らの「平凡で穏やかな人生」の中で埋没してはいたくなかった！ ステップアップしようとする意欲を見せて彼は多くの人の注意を引き、名声のある人々が支援者として近寄って来た。だが彼は小役人であり、本当の意味での教養人との付き合いは持てなかった。階級的な差異を乗り越えることができなかったのだ。1820年6月15日、ある知人にこう書いている。そもそもハノーファーでは「芸術というテーマはあまりにも関心にならず、貴族風の冷淡さに満ちている」⁽⁴⁶⁾ と。婚約していたにもかかわらず、彼はますます孤独を感じるようになっていた。独りでどこかの郊外に引っ込んでしまいたかった。気持ちがふさいでいる彼にはそこが最上の避難所に思えたのだ。あの名前の分からない知人がそれを思いとどまらせた。しかしハノーファーにいてもエッカーマンが感じるのは、自分が人格形成のあらゆる源泉からますます切り離されているということだった。芸術や学問はこの地では「ガーデンパーティーのよう」だったのだ。「私は外に出て、時々囲いの隙間から覗くことしかできませんでした。」⁽⁴⁷⁾ 才気に満ちた人達と付き合っている所でのみ彼は幸福でいられるのだろう。例えばドレスデンで芸術愛好家や芸術家や支援者達と一緒にいられれば。そう、もし彼がドレスデンで定職を見つけられたら「ハノーファーと交換することを躊躇わない」⁽⁴⁸⁾ だろう。それは少なくとも誰も世話してくれようとしなかった大学での勉強を補うものとなるからである。

戯曲の傍ら、彼の詩の数も次第に増えていった。1819年12月のフィアンセの誕生日には自分の創作作品のすべてを渡そうとしていた。彼女に「素晴らしい」⁽⁴⁹⁾ と思ってほしかったのだ。もちろんあの悲劇も。しかし様々な事情や「執拗で冴えない不快な健康状態」⁽⁵⁰⁾ のために何もできなかった。だが最初の詩集⁽⁵¹⁾ で世に出るといふ考えは、彼の頭にこびりついて離れることはなかった。彼の「^{リ-グー}歌」はハンヒェンと知り合ったことでかなりの数になっていった。それは確かに彼の数ある恋愛歌から見れば、若い頃に作った雑多な人工的な花でしかなかったのだが。彼がまとめた「様々な詩」には狩猟生活（「狩人の歌」「林務官の帰還」など）を題材とするいくつかの絵が挿入されていて、その挿絵にはいくらか「客観性」があると自惚れていた。ゲーテという模範に倣った韻文の「格言」を見様見真似で大量に書き上げたが、その頂点は「信仰の幸福」だった。出版社を口説き落とすことなど彼にはほとんど考えられなかった。ばかばかしい。だがゲーテだって『ゲッツ』を自費出版して成功を取めたではないか？ もしそれがうまくいって最終的に利益が出るのであれば、ひょっとしたらまだ大学進学へ向けて大きく踏み出すことができるのではないか！ 彼は上司に助言を求めた。フォン・ベルガー氏は彼にいつも優しく、今では彼の粘り強

さに首を横に振ることはなかった。その反対だった。氏は夢みたいな素晴らしい見通しを打ち明けたのだった！ 1821年3月22日エッカーマンは次のように書いている。「あなたが私を本当の父親のように出迎えて、帝国軍務局が私のためにすべてを取りなしてくれると約束してくれたあの晩は、ハノーファーで過ごしてきた中で最も幸せな日でした。」被服部局ではすでに1817年末以降、仕事がほとんどないために縮小されていた。人員解雇は簡単にはできず、職員は他の部局に異動しなければならなかった。補償金を払って職員の要求に決着を付けることもできた。だが国はその補償金でさえ節約していた。常勤公務員は十分に足りていたのだ。そういった選択肢についてフォン・ベルガー氏はあの晩話してくれたのであり、それでエッカーマンはようやく今後の見通しを立てることができるようになったのだった！

だが予想される補償金だけでは大学進学には足りなかった。その前に詩集の予約注文を成功させる必要があった。エッカーマンはあらゆる手段を講じた。すでに彼はゲッティンゲンのブーターヴェック教授とコンタクトを取っていたが、教授が予約注文者達からの募金を引き受けてくれた。3月7日にはエッカーマンはハノーファー知事フォン・ケンブリッジ公爵に在学中の支援を依頼し、同時に公爵夫人に詩集の原稿を送っている。自分の計画に最も良い条件を得るや否や予約注文目録をハノーファー全土の貴族達に回してもらった。期待をはるかに超える成功だった。約350部がハノーファー、ブラウンシュヴァイク、ハンブルク、オルデンブルクなどで採用され、友人や知人がそのために動いてくれた。フォン・ケンブリッジ公爵の他に、その奥方やフォン・イーゼンブルク侯爵がこの目録に目を通して。費用を差し引いて150ターラーの黒字だった。3月23日、エッカーマンはフォン・ベルガー氏との合意に基づいて、再雇用の断念と引き換えに三年間の給与の半分の支払いを軍務局に申請した。彼も今では世渡り上手になっていた。それでお金になる学問はどうなったのだろうか？ もちろんそうだし、しかも法学を学ぶことにしたのだった。支援者達はそのことに深く満足して「それはよかった！ あなたは理性的な人ですね！」と述べて、あらゆる支援を約束してくれた。いきなり彼は『詩集』の著者として一部地域の有名人となり、さらに勤勉である限り奨学金に不自由することのない法律を学ぶ大学生となったのだ。もちろん彼が不真面目であることなど絶対にありえないだろうが。

少しがっかりすることもあった。1821年5月1日、軍務局が給与の半分である150ターラーを認めてくれたのだが、それは〈二年間〉だけだったのだ。だから三年目から奨学金だけで生活していかなければならなかった！ 差し当たり彼はそんなことを気に掛けなかった。ようやく大きな目標に到達したのだ——彼はほとんど29歳を越えようとしていたのだ！ だが今では辛い仕事を成し遂げて、自由な人間となっていた。お腹を空かせることもなく、ゲッティンゲンで法学を勉強できるのだ——それは心から熱望していたことだった。1821年5月半ば、志を高く抱いてゲッティンゲン大学へ徒歩で向かった。もう一人、ミューズの若者が付き添った。チューリンゲンのミュールハウゼン出身のエルンスト・グローセである。彼は1819年からハノーファーにいてエッ

カーマンと仲がよかった。才能に溢れているが落ちぶれた天才という態度を取る印象の好くない男で、ハンヒェンはこの男の近くにいることに本能的な嫌悪感を抱いていた。それはまるでメフィストに対する『ファウスト』のグレートヒェンのようだった。グローセも悲劇を一つ完成させていて、その原稿を思い切ってゲーテに送っている。だがゲーテはそれを読まないまま送り返してしている。グローセが三ヶ月前に謁見を願い出て自分の困窮を訴えた時、ゲーテは秘書のクロイターを通じてこの貧しい男に旅の費用を捻出したことがあった。ゲーテと親しくなろうと固く心に決めていたとしても——グローセと同じようにエッカーマンが始める必要はないのであるが！

6. ついにゲッティンゲンの大学生に！

この快適なゲッティンゲンという町で、エッカーマンはすぐに自分が厚遇されていると感じることができた。健康保持に勤めねばならなかったので、詩集を手にして彼のことを歓迎してくれた学長代理が市門の外に住むことを許可してくれたのだ。これは学生達には禁じられたことだった。町中に溢れていた住居が空室であってはいけなかったのだ。「俗物達」がこの不遇の時代についてすでに十分とっていいほど愚痴をこぼしている。ハインホルツ通り26/28番地にある商人エンゲルハルトの別荘で、エッカーマンは居間と寝室を見つけることができた——しかも立派な家具もついていた！上品すぎて少しばかり費用がかさむ家だった。つまり年150マルクも必要だったのだ！近くにはウルリッヒ庭園、つまり一軒の飲食店（今は市立公園となっている）もあった。夕方になると、その家からとても素晴らしいコンサートの音楽をただで聴くことができた。この店の主人ウルリッヒの所でエッカーマンは食事を摂って風呂に入り、ヤギの乳を飲み、鉱泉の水を飲んだ。この地で戸外の緑に囲まれていると、とても澁刺とした気分になった。ヒバリの歌や門番の鐘の音を聞きながら穀物畑を彷徨い、音を立てて流れるライネ河畔に立ちゲーテの歌を口ずさんで遠くにいる恋人のことを想うと、故郷の湿地の堤防や牧草地を裸足で歩いていた少年の頃のように、ひたすら幸福を感じるのだった。ただウルリッヒは騒がしい青年で滅多にここから出て行くことはなく、もうすぐ30歳になるエッカーマンとはそりが合わなかった。当地の礼儀正しい大学生風の口の利き方は、イエーナやハレのぶっきらぼうな人達にはひどく馬鹿にされていたが、エッカーマンはそれを気に入っていた。その振る舞いの優雅さによってゲッティンゲンの大学生は傑出していたが、それもまた気に入っていた。その一方で自分の服がみすぼらしいと少々恥ずかしく思うようにもなっていた。すでに彼はバルトラム家にかなりの借金をしていたが、ハンヒェンは翌年の冬には友人カール・キーゼヴェッターが身に付けていたような青い上着に合う上質なスカーフを用意してあげなくてはならなかった。キーゼヴィッターは秋にエッカーマンと同じように法学部の学生としてゲッティンゲンにやって来て、エッカーマンと熱心に

パピアーミュレやマリアシュプリングへ出掛けていた。——素晴らしい夏の別荘は家賃が高騰してきたし、冬を過ごすには適さなかった。だから第二／三学期にエッカーマンは町中のゴートマー通り587番地（今は13番地）にあるパン焼き職人トレのもとで暮らした。ここは少なくともいつも温かく空気が濁っていた。隙間風や湿気対策がしてあって非常に快適に過ごせた。

エッカーマンは最初は熱意に溢れていた。自分に課せられたお金になる学問をせざるをえないことにも納得していた。ハノーファーの支援者やフォン・ベルガー大佐と同じく、彼は自分の基礎知識が同級生達よりも劣っているとは思わなかったし、奨学金がもらえなければ二年しか勉強できないかもしれないと思わなかった。頑張れば奨学金がもらえるに違いないからである。専門科目を概括する法律百科事典に関する講義やローマ法に関する講義（ローマ法概説）を有名な法学教師フーゴが担当していたが、彼はそれらの講義を聴講した。これらの講義が全くいやだとは思わなかった。それどころか危惧していたよりもずっと易しかった。講義の傍ら、ヘーレン教授の古代史、地誌学、民俗学の講義に聴講届を出した。教授の本を読んだことがあったのだ。だがこれらの学問は純粋な法学的思考過程を混乱させるものだった。試験準備で忙しくしていれば、法学的思考過程は自分以外の何も容認しないものである。最初の熱意はすぐに消え失せてしまった。孤独の中に沈潜することを自ら選び、物思いに耽って散歩していると、書類仕事を押し付けてくる「これからやって来る、そして消えていく人達」⁽⁵²⁾のことがまざまざと頭に浮かんできた。法学の講義中に彼は詩を書いていたし、『エドゥアルト伯爵』が心に浮かんできて書くように促してきた。彼はこの戯曲に満足しておらず手直しするつもりだったのだ。学期の中休みになると新旧の友人達とおしゃべりに夢中になった。彼らとの議論は法学とは何の関係もない話に発展していった。大抵の学生達はシラーに夢中になっていたが、エッカーマンはゲーテの味方だった。一緒に散歩している時でもこの議論は続けられた。ビールやワインを飲んでいる時はそれが夜まで続いた。とりわけエルンスト・グローセがそれに相応しい相棒だった。彼は二つ目の悲劇に取り組んでいた。彼はエッカーマンのことを羨ましく思っていたのだ！ それは『ゴールド伯爵』という作品になる予定だった。またエッカーマンよりも無口な仲間もいた。フィリップ・シュピッタといい、文字通り文学サークルを催していた。彼は後に宗教的な歌を書く作家として広く有名になった。ハインリヒ・ハイネは1826年『ハルツ紀行』のはしゃいだ気分の第一章で、ゲッティンゲンの俗物達に対して生粋のライン地方の道化帽を被せたが、彼はエッカーマンが入学する少し前にゲッティンゲン大学を去らねばならなかった。後になってハイネとエッカーマンはお互いのことを罵り合っているが、この時エッカーマンはハイネと会っていなかったに違いない。しかしシュピッタを通じて、エッカーマンはハイネのことや当時発表されたばかりの彼の悲劇『アルマンゾーア』のことを聞いていた。またシュピッタを通じて、ハイネにとってもエッカーマンは知らない人ではなかった。妻シャルロッテの自殺（1834年）を契機に書いた詩によって有名になったハインリヒ・シュテュークリッツも当時ゲッティンゲンで学んでいた。1822年の春、

後進的で非常に愛国的な学生歌を書いたために彼は退学処分になっていた。シュテークリッツとエッカーマンが学生時代に知り合いだったことを証明することはできない。グローセが1823年の夏ライプツィヒでシュテークリッツと知り合いになって初めて、シュテークリッツとエッカーマンの間に盛んに手紙のやり取りがなされるようになった。だが美学者ブーターヴェクの不運な弟子であるシュテークリッツ——1829年ブレーメン市庁舎の地下酒場でピストル自殺した——はエッカーマンと会っていただろう。エッカーマンはブーターヴェクと文学的な好み合い、この師匠に悩みを相談していたからである。耳の遠いこの老教授は以前は自分のことを詩人と思っていたのだが、新しいミューズの弟子が法学を学んでいるのをとても素晴らしいことだと思っていた。^{ポエジー}文芸は法学と一番仲良くやっていけるのだよ、この二つはまるっきりお互いに関係ないからね、と老教授は言った。だが彼自身が教壇の上から講義をしている哲学は学ばないように、この若者に私利私欲を捨てて警告した。なぜなら哲学によって君自身の詩作が完全にだめになってしまうからだよ、と老教授は言ってきかせた。この言葉はエッカーマンに非常に深い印象を与えた。だが彼がすぐに嗅ぎつけたのは、法律と文芸の結婚は長続きしないということであり、また彼自身が冗談めかして言っているように、不幸にも密かな恋人が心の中にいるために結婚を申し込まれた相手にあれこれ文句をつけずにはいられない少女のようになってしまう、ということだった。⁽⁵³⁾

彼は精力を分散させたくなかったので、学友達との交際を避けねばならなかった。学期末にはシャルンホルスト少尉とだけ時間を過ごすようになっていた。グローセは田舎に引っ込んで悲劇を執筆していた。エッカーマンは教養を積むために当分の間ドレスデンへ赴いてみたかった——それはイタリアへ赴くのも同然だった。彼はこの計画を実行する勇気がなかった。というのも費用に10ターラーかかるからである。だがもしハンヒェンがそうするように忠告してくれていたなら——心も軽く出発していたことだろう。旅に出ているなら、彼は自分の悲劇や前に彼女に話していた文芸についての理論的作品に取り組めただろう。この二つの計画を実現させるために、ドレスデンでずっと多くの刺激や新しい観点を見つけることができただろう。デンマーク出身でドイツ語で創作活動をしていた作家仲間エーレンシュレーガーも「もししばらくの間そこにいらなかったら、おそらく『コレギオ』を書けなかっただろう」⁽⁵⁴⁾と彼は遠慮がちに述べている。何度も上演されたエーレンシュレーガーの『コレギオ』を——実際はローマで書かれたのだが——彼はフィアンセと一緒にハノーファーの宮廷劇場で見ている。作家が刺激を必要とすることに彼女も理解があった。彼女は彼にただ拘摸にあわないように、そして怪しい所に行かないように注意を促してくれた。そう言ってくれて彼の心は軽くなり、今や自分を責める必要はなくなった。9月3日、彼は旅立った。身分証明書と地図を携えて、ラオホシュテットとメルゼブルク（そこでジャン・パウルという大好きなビールが醸造されていて、私もたくさんそれに口を付けた、と彼はハンヒェンに打ち明けている）を通してライプツィヒへ徒歩で向かった。ライプツィヒでは

大いに感銘を受けた。そこからオーシャッツまでは自分の「繊細な体」⁽⁵⁵⁾を労わるために1ターラーを払って贅沢な馬車を利用した。それからさらに徒歩でリーザとマイセンを通り過ぎドレスデンへ向かった。ドレスデンではラムベルクの所にいたハインリヒ・シュルツが四年前から学生生活を送っていた。天候にも恵まれ運がよかった。つまり途方に暮れて通りを彷徨っていると、シュルツが突然彼の目の前に立っていて、この愛すべき客の訪問を喜んでくれたのだった。五日間、シュルツは彼をエルベ河畔のフィレンツェにある、あらゆる芸術的栄華へ引っ張り回した。なんたる美の世界がこのよそ者の前に広がっていたことだろう！ シュルツという専門家の案内のおかげで彼は「極めて素晴らしい眺め」⁽⁵⁶⁾に遭遇することができた。「ラファエロを見るだけでも大旅行する価値がある」⁽⁵⁷⁾と彼は述べている。かつてワイマルでシラーやゲーテと懇意にし、今はドレスデンで有力者となっていた考古学者ベッティガーの講義も聴講した。その講義中、よりにもよって彼はドレスデンの「夕刊新聞」の編集者テオドーア・ヘルと向かい合って座っていた。ヘルは、エッカーマンの詩が読者数の多いこの新聞に掲載する価値がある、と評価していた人物だった。そんな彼と個人的に近づきになるには、彼はあまりに内気すぎた。

帰路は——ワイマルを通って行った。当地の公使館参事官であり、慈善家、作家でもあるヨハネス・ファルクに彼は自分の詩を送っていて好意的な意見をもらっていたのだ。だがファルクと面会することはできなかった。ファルクはある教育機関を運営していて、キーゼヴェッターの15歳の弟アウグストを厳しくしつけてもらうために彼のもとに預けられたばかりだった。彼の父親は長期に渡ってロンドンへ行っていて、母親はこの能無しに対してお手上げ状態だったのだ。すでにグローセも深刻な生活苦からファルクのもとに駆け込んでいた。エッカーマンはファルクのアドバイスに従って、秘書のクロイターを介して思い切って8月30日にゲーテに自分の詩集を送っていた。クロイターは半年前に友人グローセの面倒を見てくれたことがあった。ひょっとしたらクロイターはゲーテとの謁見を仲介してくれるのではないだろうか？ だがそれはなんとも辛い失望だった！ エッカーマンが9月14日ワイマルに到着した時、ゲーテはエーガーに出向いていたのだ。だが彼はクロイターの中に、そしておそらくゲーテの家に自由に入出入りできる友人の一人リーマー教授の中に、この作家に一番近い個人的な推薦人を獲得するのである。そうすることでネットワークの最初の網目が結びついていき、二年後には彼は抗いがたくワイマルへ惹きつけられていくことになる。

9月23日には彼は再びゲッティンゲンに到着した。それからはハンヒェンのいるハノーファーへ向けての急行軍だった。彼女に初めての教養旅行を際限なく話してあげないといけなかったのだ。手紙ではその余裕がなかった。ドレスデンにいた時の彼の手紙、つまり「いつも遠くにマドンナが見える。それに向って歩いていく。ここから見ればそれはラファエロのような女性だった。北西の方を振り返ってみると、それは君だったよ！」⁽⁵⁸⁾という文面を読んで、彼女は彼の不在を乗り越えていたのだろう。

彼が遠大な計画を抱いてこの旅行から帰還したのは少しも不思議ではない。確かに旅行中は仕事が少しも捗らなかつた。だが次の冬には絶対にあの二冊の本を世に問いたかつたし、そうしなければならなかつた。その二冊とは、戯曲、それに文芸に関する理論的な作品のことである。だが再度、自費出版者として世に出て行くのは彼の意図するところではなかつた。だから11月19日にライプツィヒのブロックハウス出版社に問い合わせ、まず彼の『詩集』の残部、つまり121部の委託販売を提案した。それが全部売れたら、さらに新しい版も出版してほしいとも提案した。目下、私は悲劇に取り掛かっています、と彼は付け加えている。それはある種のアンチ運命劇ですが、この作品で私はこの冬には世に出て行くつもりです、とブロックハウスに宛てて書いている。

だがその市場性が大部分すでに汲み尽されていた詩集を委託販売することに、この実業家は心惹かれなかつた。悲劇などもっとその気はなかつた。ちょうど一年前、ブロックハウスは初めての詩集を携えてきたハイネを撥ねつけたことさえあつた。だがこの冷たい拒絶がエッカーマンの勇気を失わせることはなかつた。それどころか彼は大胆不敵な計画をじっくり考えたのだった。「私は騒いでみなくてはならないのだ」⁽⁵⁹⁾と言ってハンヒェンを啞然とさせ、自分の計画を説明している。つまり、プロイセンの宮廷に「とても顔の利く親類」⁽⁶⁰⁾のいるシャルンホルスト少尉とともに次学期にはベルリンへ行こうとしていたのだ！そこには腕の良い法律家もたくさんいるし、文学的で芸術的な生活もあるからだった。『エドゥアルト伯爵』はまずベルリンかハンプルクで出版されねばならない！ハノーファーはやはり田舎なのだ。「私の仕事とベルリンへ行く計画は全部秘密にしておかねばなりません。あなたもそれに従っていただかないといけません」⁽⁶¹⁾と彼は1821年12月8日、おどけるような真剣さでハンヒェンに書き記している。彼が自国のお金の多くをプロイセンへ持って行こうということを知れば、おそらくハノーファーの支援者達は目を丸くしたことだろう。だがシャルンホルスト少尉もエッカーマンより懐が豊かでなかつたし、グローセがエッカーマンの乏しい有り金を食いつぶしていた。こうしてこの計画は何も実行されることなく終わってしまった。1822年2月には本気でハイデルベルク行を考えるようになっていた。ゲッティンゲンには彼にはあまりにも狭くなったのだ。ここでは「生きて」⁽⁶²⁾いけないと。コンサートマスターのキーゼヴェッター（友人キーゼヴェッターの父親）がロンドンへ赴き、ニコラという名の友人がシュトゥットガルトの宮廷楽師として雇用されていた——これが人生なのだ！遠方への衝動で彼は一杯になった。世界を見てみたかつた。少なくとも美しいドイツの世界を見てみたかつた。ドレスデンへの旅行で彼は味を覚えてしまったのだ。「ラインの空気を吸ってみたい！私は激しくそこに憧れる」⁽⁶³⁾と彼は2月末ニコラに書き、ウーラントとリュッケルトとのコネについて生々しく問い合わせている。ニコラはリュッケルトの歌に曲を付けたことがあつた。この時彼は突如ハノーファー近郊のミンデンに滞在している。静かに仕事に集中するための場所を探していたのだ。悲劇の改作が終わってさえいれば！改作が悪夢のように彼にのし

かかっていた。悲劇は第五幕で中断していた。彼がやっとこの心配から解放されると、別の作品を一気呵成に書き上げようとした。その作品とは『特にゲーテとの関連から見た文芸論集』（以下『論集』）のことである。彼が持っていたゲーテ作品をハンヒェンはゲッティンゲンにいる彼に送り届けねばならなかった。たくさん刺激を与えてくれるものの、彼との心の距離を感じさせる唯一の源泉となっていたあの小さな図書館が彼女はいやで距離を置いていたのだが。彼は突然忙しくなった。カール・エルンスト・シューバルトの小冊子『ゲーテの評価に関して』はすでに第二版が出ていて、ある見習いポストがこの著者に提供されていた。この本は彼の洞察のいくつかを先取りしていたが、多くの点で反論しなくてはならないと思っていた。彼は非常に多くの新しい洞察を目にし、学び、頭の中で整理した。生産的な仕事をして、たくさんの素材を使い果たしてしまいたかった。友人のグローセも悲劇の二作目を完成させていた。エッカーマンは己の無力を曝け出すしかないのだろうか？ 身を焼き尽くすような不安が彼を襲った。

一方、彼の専門の授業はどうなったのだろうか？ 1821/22年冬の第二学期には退屈な法学の勉強に随分手を焼いていた。だが今では多くのことを理解していた。つまり法学はあまりにも厄介で、片手間にはやれないということ。超満員の大教室で行われる週四回のケルン教授のローマ法典の授業なんかまっぴらごめんだった！ 教室は息苦しいほどすし詰め状態だったし、それで病気にもなってしまった。どうやったら彼は元気を取り戻して、悲劇にだけ取り組むことができるのだろうか？ 有名なブルーメンバッハのもとで自然史を聴講するという目的を彼は断念しなくてはならなかった。この学期で本当に有益に思ったのはヘーレンの歴史の講義だけだった。おまけにヘーレンは彼には聴講料を免除していた。歴史——そう、歴史は文芸と芸術に融合して、有機的な統一となっていくのであるが、これらは今では完全に孤立していた。そのために彼は何年もの間頑張って大学での勉学を勝ち取ったというのに。

ケルン教授はこう言った。一年半後にはきっと法学の勉強を終えることができるだろう。一年半だって？ あと一年しかここで暮らせないというのに！ キャリアを積む前に博士の学位も絶対に欲しかった。奨学金がもらえなければ二つを同時に行うことは不可能だった！ だから彼は1822年3月初めに、ハノーファー政府、王室顧問官フォン・ヒンユーパー、それにリューネブルクとヴィンゼンを所管する〈ハンブルク／ツェレ公国管区〉に書簡を送った。彼のことを気に掛けてくれた教授達が極めて立派な勤勉証明書を出してくれた。この物静かで控え目な青年に好感を抱いてくれて、その大多数は彼の詩も知っていたのだ。また法律家が不足している地方や居を定めるのに最も好都合な地方に彼のことを紹介してくれた。

奨学金申請の成果は悲しいほど少なかった。^{クロースターカマー}修道院議会から、おそらくロックムのザールフェルト大修道院長からだろうが、彼は6月15日に40ターラーを受け取った。それがすべてだった。つまり彼は決して法学の勉強を終えることができないのだ。だから二年目となる最後の年は好きな勉強だけに当てることにした。そうこうするうちに彼の母親は亡くなっていた。母のことをも

う心配する必要はなくなったのだ。彼は第三学期には古代学者ルドルフ・ディッセンの授業を聴講し、ディッセンのもとでカトゥルスやその他のラテン語の詩をドイツ語に翻訳した。こうしてこの学期は「極めて有益であると同時に最も幸福なもの」となった。今では文学以外の道などありえなかった。第四学期には一念発起して今できることを示さなくてはならなかった。だから彼は秋には完全にゲッティンゲンを去ってハノーファー近郊のエンペルデの田舎へ引きこもり、専らゲーテに関する論集に取り組んだ。それが彼の進む道から障害物を取り除いてくれるはずなのだ。彼が取り組んでいた悲劇は依然として断片のままだったが、誕生日には『論集』を推敲し始めた。彼は奨学金があるのでまだ法学部の学生と見なされていたのだが、夏にはもう法学の講義には一つも出ていなかった。ハンヒェンはそれを聞いて少しだけ驚いた。だが彼がエンペルデに滞在していることを彼女は秘密にしておかなければならなかった。エッカーマンは自分がしていることを分かっていたし、彼女も自分のすぐ近くに花婿がいてくれてとても嬉しかった。今では少なくとも毎週日曜日に会えるのだから。

エンペルデにいた1822/23年の秋から冬にかけて『論集』はついに完成した。力と意志が互いに歩調を合わせればさらに前へ進んで行けるのだろうか？ どうして彼は自分の未来を文学の中に探すのをやめないのだろうか？ 別の見通しなど彼にも全くなかった。1823年春には彼に与えられた二年も終わり、軍務局の支援も終わってしまった。唯一の、そして最後のカードである新しい本の原稿に近くて遠い未来を賭けるしかなかった。

7. どうやってエッカーマンはゲーテに会えたのか

どうやってエッカーマンはシラー心酔者からゲーテ信者へと変わっていったのか、それはすでに述べた通りである。1817年夏以来、ゲーテはエッカーマンにとってあらゆる詩的な事象の尺度であった。なぜならゲーテだけが「客観的」だったからである。1820年6月15日、彼は友人に次のように書いている。「この客観性は最も軽いものであるか最も重いかのどちらかです。客観性はゲーテにとっては軽いものです。なぜならゲーテの登場人物はゲーテが書くべきものをゲーテに口述筆記させているからです。一方、シラーにとって客観性は重いもので、それどころか彼には到達できないものであり続けました。なぜならシラーは登場人物が言うべきことを登場人物に言わせなければならなかったからです。だからシラーの登場人物は皆作者のように声高に美しい話し方をして、自分本来の性質に従って話さなくてはいけないような話し方をしていません。まただからこそ、その他の高い卓越性という点で、本当の戯曲の才能（と、そう言ってよければ本当の詩人の才能）がシラーには欠けていたと言えるでしょう。」⁽⁶⁴⁾ゲーテの客観性は『論集』の、つまりエッカーマンの未来を決定するに違いない原稿のライトモチーフでもあった。卓越した「巨匠」に対する彼の公的な告白は、すでに1821年の『詩集』の中でなされている。

若者がたくさんの美しいものを褒め称えるその様を
あの人は自分の心に忠実に再現していく。
だが、甘く移り変わることはない愛に向けられているのは
自分の感覚に完全に合致するものだけ。

歌の巨匠達が私を夢中にさせ
感激してしまうことがあるかもしれない。
だが、私が言っているのはあの人のこと
私はあの人のことだけ心に抱く。

あの人は十分に言葉を選んで
自らの愛を語り
そして人々の眼差しに触れることに喜びを感じ
自らの愛で自分を飾ろうとする。

私はこんなにも大きな欲求を抱いている
何にも束縛されず、胸を張って私の師匠だと言ってみることに
こうすることができればと思う
閣下と呼ぶこともなく。

別の詩ではエッカーマンは名前を出すことはなく「彼の方法」を描き出し、「ゲーテの多様性」という好きなテーマに関する理論的・実践的な講義を韻文形式で行っている。個人的な献辞を認めた『詩集』を彼は1821年の夏にクロイターに送り、それを尊敬する巨匠に「都合の良い時に」⁽⁶⁵⁾ 渡してくれるよう頼んだ。8月25日のゲーテ宛の添え状は次の言葉で始まっている。「閣下の不滅の作品を知るという幸福を手にしてから四年ほど経ちますが、愛と尊敬とともにあなたのことを考えない日はありません。」⁽⁶⁶⁾ それから彼が語ったのは自らの努力と詩の中で将来優れた業績を残したいという希望であり、また自分には基礎知識が欠けていて、ただゲーテ作品からのみその基礎知識が与えられたということだった。励ましの言葉と好意を少しばかり寄せてくれること以外何も願い出なかった。とりわけ彼が知りたかったのは、自分の獵師の歌が「特徴的なものを理解」⁽⁶⁷⁾ させるようにしているかということであり、またゲーテその人に寄せたこの詩の出来栄えについてであった。誕生日の簡潔なお祝いの言葉で手紙を締めくくった。すぐに読めるように自分の略歴も箇条書きで同封しておいた。特に今取り組んでいる研究と、ゲーテのために尽力しようとする論争的で批判的な論文を話題にした。そこにはこう書かれている。私は詩における

最良のものを研究して美学的な原則へと導かれましたが、その原則は「自然と生命の不変の法則に従った」⁽⁶⁸⁾のものでした。その研究で私が思い切って証明してみせたのは、「ゲーテが四方八方へと道を切り開き、道をなだらかにしてくれた」⁽⁶⁹⁾ということであり、またこの道が唯一の正しい道である、ということです。ゲーテのことを非難する人やその口真似をする人によって言われるのは、「ゲーテは価値がない」⁽⁷⁰⁾ということのようです。私はこのゲッティンゲンですでにこれに関係する「たくさんのこと」⁽⁷¹⁾を書き記してきました。私がこれらを一つの全体へまとめ上げるのにたった四週間の休息があれば十分です。また自分が今取り組んでいる悲劇を作り直すのに、さらに四週間いただければと思います、このようなことが略歴には記されていた。「少し励ましの言葉をいただければ、多くのことがうまくいくでしょう！」⁽⁷²⁾ この最後の文は厚かましすぎて、しつこくないだろうか？ すぐその下に彼は追伸の言葉を残している。「励ましの言葉がなくても〈きっと〉うまくいくはずです。」⁽⁷³⁾ 計画していた訪問については何も言わなかった。——だがこの内容豊富な手紙は、大量の誕生日のお祝いに言葉の中に紛れ込んでしまいかねなかった。だから彼は手紙と本を8月30日にワイマルへ発送した。⁽⁷⁴⁾

こうしてゲーテは極めて多様な方法で、見知らぬ青年から話しかけられていることに気付いていく。つまり、手紙、詩、略歴、ゲーテの創作全体に関する批判的評価と賞賛に関する論文の計画によって。そのような計画がゲーテの心を動かすことがないと分からぬほど彼は自惚れてはいなかった。だが経験から分かっていた。これまでも並外れた決意を変えないできたこと、そして計画倒れになりがちな人が信頼を得るには、最初はいつも控え目さが必要とされることに。無名の人物が自らの力によって人間的な発展を遂げていくことに、ゲーテは折に触れて関心を寄せていた。例えばゲーテはボヘミア人フェルンシュタインのような「自然詩人」に目をかけた。またゲーテは誰かが自分の状態をはっきりと言ってくれるのを好ましく感じていた。さらに自分の歩んできた道から遠く離れていればいるほど、その見ず知らずの「状態」を覗きこんでみることを好んだ。この詩人はいくらか好奇心旺盛であることが必要なことだと思っていたのである。エッカーマンの手紙に虚飾はなかったし、エチケットに欠けるということもなかった。ただ思わず人を虜にしてしまう子供っぽい純真さがエッカーマンにはあったので、もし9月14日にワイマルでゲーテに会っていたら、他の多くの三文詩人と同じように彼もきっと好意的に迎え入れられただろう。ゲーテは独創性に拘ることを嫌っていたので、ゲーテというオリンポスの住人を前に遠慮して、独創性を欲望しなくなるあの三文詩人達と同じように。だがこの時もきっと二人の間により緊密な結び付きが生まれることはなかっただろう。そのための前提は、二年後に『論集』という一冊の本へ成長していくことになる当時はまだ計画段階の論文によって初めてなされるのである。1821年にゲーテに会えなかったことは確かに期待外れであった。だが同時にそれは幸運でもあったのだ。

そういう場合にはお決まりの手紙と荷物に対する型通りの文面を、エッカーマンは常勤書記の

ヨーンから受け取った。たくさんの届け物と問い合わせがあって個人的に返事を書くことができません、その中の伝える価値のあるアイデアや感覚を刺激するものに対してはゲーテ発行の『芸術と古代』誌上で言及されるでしょう、「このお返事に満足していない大切な文通者達」⁽⁷⁵⁾はこの雑誌を読んでいただければと思います、そのような内容が記されていた。この返事はどうしようもない楽観主義者にとってさえ何の意味もないものだった。それにもかかわらずヨーンの手紙を見たハンヒェンに対して、10月21日エッカーマンは「ゲーテと意見が一致していると考え、私は大いに安心しましたし自信が出てきました」⁽⁷⁶⁾と言っている。その言葉から判断すると、賞賛や賛同と見なすことができる何か、いずれにしてもクロイターによって何らかの方法で伝えられたに違いない。繊細で神経をすり減らすエッカーマンの生活において夢というものが大きな役割を果たしている、寝ている時もゲーテへの想いとらわれていたとしても、それは全く不思議なことではない。ゲーテのそっけない自然さが極めて明確に現れている夢を、彼は次のようにフィアンセに語っている。

「昨晚はずっとゲーテの夢を見ました。彼とたくさん話をしました。ずっと彼の足をつかんでいましたが、彼は厚手のももひきを履いていました。彼はこう言いました、こうしないと温かくなれないのだ。彼はすでに年老いていましたが、私にとっても親切にしてくれました。部屋から片手いっばいに洋梨をいくつか持ってきて皮を剥いてくれたのですが、それは茎の所だけでした。全部食べるように言われましたが、私はこう言いました。ハノーファーにいる私のハンヒェンに二つ持って帰りたいのですが、復活祭に間に合うように到着できれば、きっとその間はずっと思います。私は洋梨を二つカバンにつっこみました。彼は私にオットーリエ（ゲーテの息子アウグストの妻）の二人の子供を紹介してくれましたが、二人ともブロンドの巻き毛をした可愛らしい丸々とした子供でした。「息子を通じて、お前は父親にとっても素晴らしい男の子達を届けてくれる（bringen）」という（息子の妻に向けられた）彼の詩を私は朗詠しました。彼の考えではそこは「授乳する（stillen）」でなくてはならないということでしたが、私はこう言いました。あなたは自分の詩のことをもっとよく知った方がいいですよ、絶対に「届ける（bringen）」ではなくてはなりません。すると彼も私が正しいことを認めてくれました。彼はこの歌を聞いて涙を流しました。私はこう言いました。この詩のことを考えて心が重くなっているのですしたら、すぐにそこから抜け出さねばなりません。ですが私には期待して下さい。そうすれば安らかにお亡くなりになります。私のことをどう思っているか尋ねてみました。物事を正しく始めればいつか今の自分と同じような名誉を持つことができるだろう、なぜならあなたの才能は自分の才能よりも乏しくないからだ、と彼は答えてくれました。夢の中でしたが誇張だと思いました。しかし心の中では嬉しくて私にできることをやってみようと思いました。それをどうやって始めたらよいか彼に尋ねました。しかし彼はそれを私に言うのは危険だと言って曖昧にしました。それから彼は会話を別のことに持って行ってしまい、私と一緒に庭へ入って行きました。ワイマル大公とその他

の偉い男達が彼の所にやって来ました。しかし彼はその人達を大ホールに残して行きました。彼らが行ったり来たりする様子が遠くから扉が開いた時に見えました。私は彼の部屋にいました。時折、他の人の所へ行ってしまいましたが、彼はずっと私の傍にいてくれました。』⁽⁷⁷⁾

願望から生まれたものであったにしても、この夢にどれほど予言的なものが現れていることだろう！ 実際、ゲーテに対する後のエッカーマンの関係は協力的であったり子供じみたものであったりして、食事で騒がしくしている時にはゲーテは彼に葡萄や他の果物をテーブルでこっそり渡していたのだった。部屋から持ってきた洋梨は間違いなく少年時代のエッカーマンの嬉しかった体験である。下層階級出身という過去が彼にどれほどのしかかっていただろう。いかに善意があったにしても、ゲーテは彼が上流社会からかけ離れた人物と見なしていた。——カール・アウグスト大公がゲーテの家に立ち寄って同時刻に逗留している時でも、実際エッカーマンはいつもただ遠くから殿下を見ていた。「ブロードの巻き毛をした可愛らしい丸々とし」ていたに違いないゲーテの二人の孫のことを、子供好きのエッカーマンが夢の中のことあったにしても忘れることができただろうか？ 彼は自分の詩的な能力についてよからぬ過大評価をしていたが、こうしたナイーブさがあったので思い上がる気持ちを抱くことはなかった。だがまたしても未来のおぼろげな予見がここに現れている。この夢のように、ゲーテはいつもエッカーマンの持つ実際の能力を曖昧にしか言わなかったのだ！ ——

『芸術と古代』次号ではエッカーマンの詩集については一言も触れられていなかった。だがワイマルへと繋がる糸が彼とは無関係に紡がれていた。ハノーファーのいたずら者のアウグスト・キーゼヴェッターが、庭で過ごすゲーテを観察する手段と方法を見つけていたのである。キーゼヴェッターは教育者ファルクの希望を受けて、エッカーマン宛ての手紙という形でそれに関連する論文の一つ書いてきた。この論文は後におそらくファルクによって文体チェックされて、ファルクの死後初めて出版されることになった『親しい個人的な付き合いから見たゲーテ』という本に採用されることになった。この「初めてゲーテを見た時16歳だった少年の手紙」は、老ゲーテが現れると若い人達にどれほど影響力を及ぼすかを示すものであった。キーゼヴェッターがゲーテをこんなにも近くで見ることのできる幸運に恵まれていたので、このスパイのことがエッカーマンは羨ましくてならなかった。1822年2月27日、彼はキーゼヴェッターの手紙をハンヒェンへ送った。そこには次の指摘がある。「ゲーテが私の詩集を手にしたということもこの手紙が書いている。」⁽⁷⁸⁾ ファルクの本はそのことについて何も述べていないし、彼の施設の書類の写しを見てもそのことには触れられていない。ということは、消息不明のオリジナルの手紙にこの報告が含まれていたに違いないのだろう。だがやはりこの報告は、エッカーマンの詩集をゲーテが手にするのを見たクロイターにのみ起因されうるものである。

1822年の5月末か6月初めにカール・キーゼヴェッターもワイマルへ行って、ゲーテに謁見を許されるという幸運を得た。彼はあるニュースをゲッティンゲンへ持って帰ってきた。ゲーテが

『詩集』について批判的に意見を述べて下さるだろうし、エッカーマンによろしく言っておいてほしいと言われた、また彼には「たくさん好意や励ましを約束する」ということだった。1822年10月18日、自分の人生について書いた手書きのスケッチの中で、エッカーマンはこうした経緯を書き記している。またフィアンセにもすぐに、1822年6月には喜んで同じことを伝えている。ハンヒェンはこの出来事の意味を評価する術を心得ていた。「ゲーテがあなたのことについて何か書いて下さるなら(…)あとまでずっと残りますね、ゲーテがいなくなってもね。これ以上の幸運はありませんね」⁽⁷⁹⁾と6月15日に彼女は返事をしている。

こうしてワイマルへの糸は途切れることはなかった。今やこの糸をしっかりとした紐へ織り込んでいくことがエッカーマンの課題となった。この目的のために彼は1822年秋にはエンペルデに戻り、ゲーテについての小冊子を完成させた。ハンヒェンが近くにいたので彼女に手紙を書く必要はなかった。手紙のやり取りはこの冬に中断している。1823年の春になると手紙は再開されるが、5月24日の最初の一枚はゲーテに向けられている。エッカーマンはまず「閣下がいくらか敬愛を寄せて賞賛してくれるという幸運をもたらしてくれた」⁽⁸⁰⁾自分の詩集について言及している。つまり、それを伝えてくれた信頼できる証人がいたということに違いない。彼は『特にゲーテの関連から見た文芸論集』の完成原稿について語り、そこで「正しいことと間違っただけの確執」⁽⁸¹⁾を決定付けしようとしている。「あなたを支持している忠実な生徒として、私はあなたの作品を絶え間なく研究したり自分で考えてみて見つけたものが正しいことだと思っています。間違っただけは、特にゲッティンゲン大学在学中に毎日矛盾として私に歩み寄ってきました。私はいつもそれと戦わなくてはなりません(…)。誤りは、間違っただけを正しいと確信してしまうことに基づいている、とあなたはどこかで言っていますね。だから、例えばそのような確信をしてしまう人をなんとかしようとするのは難しく、いつも反対のことだけを述べるのが一番いいのだ、とも。いずれにしても私は平和に過ごしたいと思いを巡らしてきましたし、良い仕事ができるようにこの教えに仕え従ってきました。ですから私の本には争いよりも休息と平和が漲っています。」⁽⁸²⁾つまり彼は「ゲーテのことを非難する人やその口真似をする人」に反論するという当初計画していた論争を断念し、ゲーテ自身の考えに適切に従ったのである。

彼はこう続けている。この本はとりわけ自分を苦しめていた状態から脱出する手助けとなるに違いありません。いずれにしろ大学で勉強を続けていくことは私には考えられません。また私の全存在は実践的なことに向けられています。ですから私は自分の力に見合った仲間を求めています。私は仕事上必要な手紙の書き方も学びましたし、物事を明確に推し進め表現する能力も望むらくは私の本の中でお示ししました。私はこの本をコッタ出版に提案したいと考えています。この本に事前に目を通して推薦文を添えてくれるつもりはないでしょうか。リーマー教授はあなたにこの原稿を見せているのだと思います。あなたが私のお願いをうるさく感じず、むしろ私の仕事を喜んで下さるものと期待しています。

この人懐こい青年が「自分の力に見合った」仲間を自分の周りに見つけたいということ以外、ゲーテでもこの手紙から読み取ることにはできない。そのことを以下の文章もほのめかしている。「私の人格形成のすべては閣下のおかげです。そのことは私の文章のどの行からも分かるでしょう。あなたから生まれてきたものや、生まれてくるもの以外、私にぴったりくるものはこの世にありません。」⁽⁸³⁾

同時にエッカーマンはリーマーに原稿を送っていた。エッカーマンはアウグスト・キーゼヴェッターについてリーマーと何度も文通をするような間柄になっていて、二週間後には自分もワイマルへ行くつもりであることを伝えていた。また彼はリーマーに自分の苦境をいつもより少し強い調子で訴えた。彼はこの原稿にコッタ宛の手紙を添えた。その手紙で彼は「きわめて正当な報酬」と引き換えに自分の本を提示している。「祖国の極めて優秀な男達」、とりわけ遠くから私に「好意と励ましの言葉」をかけてくれる「ゲーテ」と個人的により親密になるために私は今旅に出ているので、イエーナにいるゲーテの最も古い友人フォン・クネーベル氏に返事を送ってほしい、と彼は書いている。⁽⁸⁴⁾ 彼は1821年にフォン・クネーベルにも詩集を送っており、励ましの返事を受け取っていた。

エッカーマンは自分の本の販売を急いでいた—— そうしなければこの夏をどうやって生きていけたらろう？ だから彼はゲーテ宛の手紙の返事を個人的にもらわなくてはならなかったのだ。こうして彼は5月25日または26日にゲッティンゲンへ向かい、そこから6月2日にはワイマルを目指した。その道のりは遠く、150キロほどあった。ヴィラ溪谷では、元気な若者が徒歩で向かうには適さないほど太陽が熱く照りつけていた。だが希望が彼の足を速め、優しい守護神が自分の進むこの道を導いてくれるという確信をますます強く抱くようになっていた。6日または7日に彼はワイマルに到着し、9日にはゲーテのもとに出向き、10日に初めてゲーテの目の前に歩み出た。

ゲーテはエッカーマンの原稿にすでに目を通していた。ゲーテの判断はこうだった。「推薦する必要もありません。内容そのものが立派に自分を推薦しています。みんな読みたがりますよ。素晴らしい明晰さ、思考の流れ、全部きちんと考え尽くされていますし、素晴らしい文体です。」⁽⁸⁵⁾ ゲーテはもっと言葉を付け加えることもできたらろう。つまり、あなたは驚くべき能力によってあらゆる煩わしい形式ばったものを削ぎ落とし、単純な言葉で素人にも分かるように重要な芸術法則を示していますし、あなたの愛すべき性格は全体を透視し、著者の人格にも好印象を与えています、とも。多くの同時代人の響きを買った『親和力』を非常に巧妙かつ細かく解剖できる者であれば、他人の本性へ入り込み、その人の考えたことを洗練した形で再現するだけでなく、自立的に再構成するという類まれな能力を持つものである—— そうした協力者をゲーテは必要な時に使用できるのだ！

二人の最初の出会いがどう展開していくかは、エッカーマンの『ゲーテの対話』にこれ以上な

いほど描写されている。この日から31歳の男が74歳の文豪に対して無邪気で打ち解けた関係を持つようになったのだが、それをエッカーマンは次のように自分の言葉で述べている。「落ち着いた打ち解けた気分で、私達は長い間一緒にいました。私は彼と膝を突き合わせて、話すのも忘れて彼をじっと見つめました。いくら彼を見ても見飽きることがありませんでした。(…)そばにいただけで言葉に言い表せないほど心地よい。私は心が安らぐのを感じました。多くの苦勞と長い間の希望の末、遂に一番嬉しい願いが叶った人みたいに」。⁽⁸⁶⁾ — 1821年12月の夢がこうして明るく輝く素晴らしい現実となったのだ！

本稿は H. H. Houben: *Goethes Eckermann. Die Lebensgeschichte eines bescheidenen Menschen*. Berlin / Wien / Leipzig (Paul Zsolnay) 1934の第3章から第7章までを訳出したものである。第3章までは以下を参照のこと。

林久博：「翻訳：H. H. ホウベン『ゲーテのエッカーマン——ある控え目な人間の伝記』（1）」、『文化科学研究』第31巻・通巻第52号，中京大学文化科学研究所，2019年，53～63頁

注：

- (1) Houben, Heinrich Hubert: *J. P. Eckermann. Sein Leben für Goethe. Teil 1. Nach seinen neu aufgefundenen Tagebüchern und Briefen dargestellt*. Hildesheim (Dr. H. A. Gerstenberg) 1975, S. 25.
- (2) Ebd., S. 26.
- (3) Eckermann, Johann Peter: *Gespräche mit Goethe in den letzten Jahren seines Lebens 1823-1832*. Berlin (Deutscher Klassiker Verlag) 2011, S. 25.
- (4) リュッツォウ義勇部隊 (Lützowsches Freikorps) は1813年から1814年の解放戦争におけるプロイセン軍の義勇部隊。その指揮官はルートヴィヒ・アドルフ・ヴィルヘルム・フォン・リュッツォウ少佐。この時の副官がテオドル・ケルナー。
- (5) Eckermann: *Gespräche mit Goethe*, S. 26.
- (6) Ebd., S. 27.
- (7) ベラリアンス (ワーテルローにあった宿屋の名) のナポレオンとの決戦 (1815年) を英将ウェリントン は「ワーテルローの戦い」と呼んだが、プロイセンのブルッヒャー元帥は「ベラリアンスの戦い」と呼んだ。
- (8) Houben, S. 56.
- (9) Ebd., S. 29.
- (10) Eckermann, S. 29.
- (11) Houben, S. 46.
- (12) Eckermann, S. 30.
- (13) Houben, S. 49.
- (14) Ebd.
- (15) Eckermann, S. 30.
- (16) Houben, S. 50.
- (17) Ebd., S. 52.
- (18) Ebd., S. 53.
- (19) Ebd., S. 55.
- (20) Ebd.

- (21) 「それをお前が呼び覚ましはしない、燃え上がる炎よ」(Den du nicht erregst, Treibender Funke) というエッカーマンの詩句は、ゲーテの「旅人の嵐の歌」の „Den du nicht verlässt, Genius “という詩句を彷彿とさせる。Goethe: *Wanderers Sturmlied*. In: *Werke*. Band 1. Gedichte und Epen 1. Textkritisch durchgelesen und kommentiert von Erich Trunz. München (C. H. Beck) 1993, S. 33.
- (22) これはゲーテの1777年頃書かれた詩「銘肝」(Beherzigung) の一部。Ebd., S. 133.
- (23) Eckermann, S. 28.
- (24) Houben, S. 57.
- (25) ホウベンは「5月25日」と特定しているが、『ゲーテとの対話』では「5月12日」となっている。Eckermann, S. 159.
- (26) https://commons.wikimedia.org/wiki/Category:Georg_Melchior_Kraus?uselang=de#/media/File:JW_Goethe_by_GM_Kraus_1775_76.jpg (閲覧日：2020年6月30日)
- (27) Houben, S. 33.
- (28) Ebd., S. 32.
- (29) Ebd., S. 77.
- (30) Ebd.
- (31) Ebd., S. 71.
- (32) Ebd., S. 72.
- (33) Goethe: *Faust*. In: *Werke*. Band 3. Dramatische Dichtungen 1. Textkritisch durchgelesen und kommentiert von Erich Trunz. München (C. H. Beck) 1996, S. 14. (Z 186-187)
- (34) Houben, S. 74.
- (35) Eckermann, S. 32.
- (36) Ebd., S. 33.
- (37) Tewes, Friedrich: *Aus Goethes Lebenskreise. J. P. Eckermanns Nachlaß*. Band 1. Berlin (Goerg Reimer) 1905, S. 235. [Reprint]
- (38) Ebd., S. 234.
- (39) Ebd., S. 235.
- (40) Ebd.
- (41) Ebd.
- (42) Ebd.
- (43) Eckermann, S. 33.
- (44) Tewes, S. 234.
- (45) シェークスピアの『ロミオとジュリエット』（第四幕・第五場）に由来する決まり文句
- (46) Tewes, S. 236.
- (47) Houben, S. 104.
- (48) Tewes, S. 236.
- (49) Tewes, S. 9.
- (50) Ebd.
- (51) エッカーマンの最初の『詩集』（1821年）は [1] 歌 [2] 様々な詩 [3] 格言 [4] 訓戒という四部構成となっている。これらを踏まえて本文を読む必要がある。
- (52) Houben, S. 86.
- (53) Eckermann, S. 35.
- (54) Tewes, S. 16.
- (55) Ebd., S. 18.
- (56) Ebd., S. 19.
- (57) Ebd.
- (58) Ebd.
- (59) Ebd., S. 20.
- (60) Ebd., S. 21.
- (61) Ebd., S. 22.
- (62) Houben, S. 92.

- (63) Ebd.
- (64) Tewes, S. 235f.
- (65) Houben, S. 97.
- (66) Ebd., S. 98.
- (67) Ebd., S. 99.
- (68) Ebd., S. 106.
- (69) Ebd., S. 105.
- (70) Ebd., S. 106.
- (71) Ebd.
- (72) Ebd.
- (73) Ebd.
- (74) ゲーテの誕生日は8月28日
- (75) Houben, S. 109.
- (76) Tewes, S. 20.
- (77) Houben, S. 110-112.
- (78) Tewes, S. 25.
- (79) Houben, S. 114f.
- (80) Ebd., S. 116.
- (81) Ebd.
- (82) Ebd., S. 116f.
- (83) Ebd., S. 118.
- (84) Ebd., S. 120.
- (85) Eckermann, S. 40.
- (86) Ebd., S. 40f.